

クマタカ放棄巣にサシバが営巣

池田善英*・堀本尚宏・真崎 健

日本海ワシタカ研究会、〒921 石川県金沢市八日市3-210 希少猛禽類研究センター内

はじめに

富山県において、クマタカ *Spizaetus nipalensis* の繁殖は、県東部の立山連峰山麓の美女平付近で確認されていたが(富山県自然保護課 1980)、県西部では確認されていなかった。筆者らは、1986年より富山県内におけるイヌワシ *Aquila chrysaetos* を主としたワシタカ類の生息および繁殖分布調査を行ってきたが(池田ほか 1990, 池田 1994)、県西部の小矢部川水系で1993年3月にクマタカの営巣をはじめ確認した(池田, 未発表)。1994年2月には、庄川水系で県西部では2例目の営巣を確認した。この営巣地は4月はじめに放棄されたが、5月はじめにはまったく同じ巣でサシバ *Butastur indicus* の営巣が観察された。本報では、この事例を報告する。

本文に先立ち、現地調査の実施にあたって便宜をはかって下さった建設省利賀ダム工事事務所、(株)建設環境研究所、アースコンサル(株)に厚くお礼申しあげる。また現地調査に協力していただいた日本海ワシタカ研究会の須藤一成、池田真弓ほか多くの会員に感謝する。

クマタカの営巣確認

営巣が確認された地域は、県西部を流れる庄川水系利賀川流域の利賀村にあった。流域一帯には、ブナ *Fagus crenata* 林が点在するが、そのほとんどはスギ *Cryptomeria japonica* 植林やミズナラ *Quercus crispula* などの二次林となっている。

今回の営巣地を含む周辺地域で、クマタカの調査を開始したのは、1992年9月であった。以来、毎月3～5日(延べ30人・日)程度の頻度で、同種の繁殖および生息状況調査を継続してきた。1993年5月15日に、今回の営巣地域周辺で、営巣期に聞かれることの多いクマタカ成鳥の鳴き声が早朝に聞かれ、営巣の可能性が高いと考えられた。しかし、同年9月までの調査で、この地域で成鳥がほとんど観察されなくなり、巣立ちビナも観察されなかったことから、繁殖に失敗した可能性が高いと考えられた。

次の繁殖期のはじまる1993年12月以降、調査地域で成鳥2羽のクマタカが再び頻繁に観察されるようになった。1994年1月30日、前年より営巣の可能性が高いと考えられていた地域で、成鳥2羽が飛行中に足をからませるディスプレイや、侵入してきたほかのクマタカ1羽を追い払う行動も観察された。2月6日、成鳥1羽がその地域の落葉樹に頻繁に止まり、くり返し鳴き声をあげ、日没前には隣接したスギ植林内に入り、ねぐらをとっていた様子であった。

2月7日に集落のすぐ後背地の東向き斜面のブナ林内に巣が確認された。営巣木は、ブナ林のほぼ中ほどの標高505mの地点に生えていたブナであった。巣には、2月5日以前に降った雪が厚く積も

1994年11月25日受理

* 金沢大学大学院自然科学研究科生命科学専攻環境生物学講座。〒920-11 石川県金沢市角間町

キーワード：クマタカ、サシバ、古巣利用

り、搬入されている巣材の様子などはわからず、成鳥の出入りも確認できなかった。

2月18日、営巣木周辺で成鳥2羽のつがいが午前中のほとんどの時間に観察され、ブナ樹上での交尾も5回観察された。巣上には1m以上の積雪があり、12回（雄11回、雌1回）運搬された巣材は、その上に置かれていた。その後、2月から3月にかけての期間、営巣地を中心とした調査地域一帯では、成鳥1羽または2羽によるディスプレイ飛行が頻繁に観察された。3月5日には、巣上の積雪はほとんどなくなっていた。まだ産卵には早い時期と考えられたが、成鳥1羽が巣より10mほど上方のブナに止まっていた。3月7日、営巣斜面のすぐ上空を通過したイヌワシ亜成鳥1羽（前日からの観察により、周辺の定住個体でなく、単独の放浪個体と推定される満2才鳥）を、営巣斜面上部より飛びだしたクマタカ成鳥1羽が、ディスプレイをしながら追い払う行動も観察された。

クマタカの営巣放棄

北陸地方では抱卵初期にあたると思われる4月2日に巣を観察したところ、巣内にはわずかに積雪が残っていたが、産卵や抱卵に支障となるほどではなかった。新しい青葉の付いたスギの枝が巣に敷きつめられていたが、親鳥の姿は確認できなかった。観察開始時刻の少し前から、営巣木のあるブナ林の下方のスギ植林近くで、前日以前に枝打ちしたと思われるスギの生枝や葉を燃やしはじめていた。煙は、沢の地形にそって営巣斜面を立ち上り、煙のために営巣木もしばしば見えなくなった。煙は、8～10時と15～17時にかけて立ち上り、数人の作業員による枝打ちも並行して終日行なわれていた。翌3日の夕方にも、2時間ほど煙が上がっていた。

4月1日から4日の4日間、営巣地の周辺地域で成鳥1羽は観察されたが、観察頻度は少なく、営巣地に近づくこともなかった。4月10日も観察したが、成鳥は巣内に確認されず、周辺でも観察されなかった。約300m離れた水平位置からの遠望のため、巣内の様子の詳細が観察できないため繁殖段階は不明だが、スギ植林の枝打ち作業の人影と枝葉の焼却による煙の双方の影響により、営巣を放棄したと考えられた。

サシバの営巣

ブナ林はすっかり展葉していたが、5月2日にクマタカの放棄巣を再確認したところ、巣内にサシバ成鳥1羽が座っていた。すぐ近くのブナには、別の成鳥1羽が止まっており、鳴き交わしながら巣材の運搬が行なわれていた。5日までの4日間、この営巣地域でサシバは頻繁に観察されたが、クマタカは観察されなかった。

この後、ブナ以外の亜高木なども展葉したため、巣の直接観察ができなくなった。しかし、サシバの育雛期と考えられる6月から7月にかけても、営巣地の周辺地域でサシバが観察された。また、サシバの渡りがはじまる時期ではあるが、9月25日にはサシバの成鳥2羽と幼鳥1羽が、営巣地域で観察された。したがって、サシバがこの巣で繁殖していた可能性は高いと考えられる。

4月に営巣放棄したクマタカは、営巣地から1～2km離れた地域ではほぼ毎月観察されたが、営巣地の周辺地域では観察されず、クマタカが自分の放棄巣に営巣するサシバに対してのなわばり行動などは観察されなかった。クマタカのつがいが営巣地域で再び観察されたのは、上述のサシバの親子が観察された9月25日であったが、両種間でのなわばり行動などは観察されなかった。

考察

ワシタカ類において、巣を架ける樹木や岩壁などの営巣環境が似通った種間では、営巣開始時期の

早い種や大型で強い種から優良な営巣地を占有し、営巣の遅い種や弱い種は劣った営巣地しか利用できないことが知られ、さらに、お互いの古巣を利用する例も多く知られている (Newton 1979). 国内でも、営巣開始の早いイヌワシが放棄した巣で、その年の繁殖期にノスリ *Buteo buteo* が利用した例が知られている (山野井 1986).

クマタカの古巣はサシバの通常の巣よりはるかに頑丈な上、営巣場所の選択や造巣に留鳥ほど多くの時間をかけることのできない夏鳥であるサシバにとって、同じ樹木営巣種としては営巣のための格好の資源であったに違いない。今回、サシバがこの資源を利用できたのは、次の2つの条件がそろったからと考えられる。

まず、今回の調査地域で1994年の春にサシバが初認されたのは4月3日で、クマタカの営巣放棄と前後する時期であった。この時点では、クマタカが放棄した巣内には、青々としたスギの枝がぎっしり積まれていた。クマタカを含め、多くのワシタカ類が造巣から育雛期間を通して、青葉のついた枝を巣に積んでおくのは、その巣が使用中であることを同種の他個体や他種に示すことが第一の理由と考えられている (Newton 1979). しかし、放棄してから、クマタカはこの巣に近づいておらず、青葉の付いた巣材は補充されなかった。したがって、サシバの巣材運搬が観察された5月初旬までには、クマタカが放棄以前に積み上げた青葉の色が褪せて、その巣が未使用であるとサシバが判断したと考えられる。

次に、クマタカなど、繁殖つがいの行動圏内に周年留まるワシタカ類の多くは、営巣なわばりの範囲内に複数の交代巣をもち、毎年または数年おきに使うことが知られている (Newton 1979). 今回の場合も、サシバが利用した巣が、クマタカがその年に利用していない巣であっても、隣接して存在すると考えられる別の交代巣でクマタカが営巣していた場合には、クマタカの営巣なわばり行動によってサシバの利用は阻止されたと考えられる。しかし、クマタカはその巣での繁殖を断念した後、繁殖を行なわなかった。したがって、サシバの営巣の開始以前に、クマタカの営巣なわばりが消滅していたことが、サシバの利用を許すことになったと考えられる。

引用文献

- 池田善英. 1994. 富山県におけるイヌワシの繁殖生活と現状. グルーミング (20) : 4-7.
池田善英・山本正恵・松村俊幸・太田道人. 1990. 富山県におけるイヌワシの分布と個体数推定. 富山市科学文化センター研究報告 (13) : 131-140.
Newton, I. 1979. Population Ecology of Raptors. T & AD Poyser, Berkhamsted.
富山県自然保護課 (編). 1980. 富山県の鳥獣. 富山県, 富山.
山野井昭雄. 1986. イヌワシが放棄した岩壁でノスリが営巣. *Aquila chrysaetos* (4) : 23-24.

Grey-faced Buzzard-eagles nesting at an abandoned Hodgson's Hawk-eagle nest

Yoshihide Ikeda*, Naohiro Horimoto and Ken Mazaki

*Nihonkai Working Group on Birds of Prey, c/o Rare Raptor Research Center,
Yokaichi 3-210, Kanazawa 921*

On 7 February 1994 a Hodgson's Hawk-eagle's *Spizaetus nipalensis* nest was discovered

in a deciduous tree in western Toyama Prefecture. This was the second record of nesting of the species for that area. In early April, the nest was abandoned because of human disturbance by cutting and burning scrub and undergrowth. A month later, a pair of Grey-faced Buzzard-eagles *Butastur indicus* nested at the abandoned nest.

* Department of Environmental Biology and Health Science, Kanazawa University,
Kakuma, Kanazawa 920-11.

Key words: *Butastur indicus*, *nest reuse*, *Spizaetus nipalensis*